

東京大学出版会は1951年、当時の東大総長南原繁の発意に基づき、国立大学としては初めての大学出版部として創立されました。70周年を迎えた本年までに刊行した書籍は7,800点余にのぼります。

今回のフェアでは、そのなかから、歴史と現在と未来を照らし出せるような選りすぐりの書籍を選びました。それぞれの書籍群は以下の3つのカテゴリーに分類されます。

第1に「大学教科書」です。東大をはじめ多くの大学で使用されてきたオーソドックスな教科書から次代まで使用され続ける新しいスタイルの教科書まで、多様な教科書をそろえました。いうまでもなく良質な教科書とは、大学の中でのみ使用されるものではありません。ひろく実務家・社会人・読書家にも歓迎されるものでもあります。

第2に「教養書」です。大学の知を社会に開いていくことは、出版部のみならず大学そのものの主要なミッションでもあります。人文社会科学から自然科学まで、読者に支持された多数の教養書をご覧ください。幸いです。

このように教科書や教養書刊行という一般社会に開かれた出版活動を一つの軸足に置きながら、もう一方の軸足はいうまでもなく大学の中にあります。すなわち第3の出版領域として挙げられるのが「学術書」です。密度の高い研究成果を一冊の書物に集約させた学術書には少数ながらも必要とする読者が確実に存在し、そして長く読まれ続けるものです。

この一年は、想定外のコロナ禍によって社会のなかで専門知の役割が重視されたことは間違いありません。しかし一方では、文系不要論がいまだに叫ばれ、日本学術会議の存在が疑問視されるなど、学問と社会のあり方が再考を迫られた年でもありました。そうであるならば、こういう状況のなかでこそ、大学と「知」の意義を再確認すべきではないでしょうか。「学問の入口フェア」はそのような意図のもと企画されました。